

主題研究

特殊学級担任の指導力の向上を目指す 研修の在り方に関する実践的研究

- 研修の内容と方法に視点を当てて - (第1報)

特別支援教育室 高橋 由紀子

研究協力校

花巻市立湯本小学校

石鳥谷町立石鳥谷中学校

研究の概要

この研究は、小・中学校の特殊学級において、児童生徒一人一人の「生きる力」をはぐくむための指導内容・方法についての研修試案を作成し、研修試案に基づいた実践をとおして、特殊学級担任の研修の在り方を明らかにし、小・中学校特殊学級担任の指導力の向上に役立てようとするものである。

本年度は2年次研究の初年度として実態調査を行い、特殊学級担任の研修の現状や課題についての分析・考察を行った。

その結果、特殊学級担任が求めている研修内容は多様なニーズに対応したものであり、さらに研修方法についての問題点が明らかになった。そこで、これらの調査結果をもとに、特殊学級担任が主体的に取り組むことのできる研修試案を作成した。

キーワード：特殊学級 研修 特殊学級担任 専門性 研修試案

研究の目的

特殊学級においては、児童生徒が将来にわたって、地域の中で豊かに生活することができるように「生きる力」をはぐくむことを目指し個々の発達の状態や特性等に応じて指導することが必要です。そのために、特殊学級担任は児童生徒一人一人の実態を的確に把握し、指導内容・方法等の理解を深めることが求められています。

しかし、特殊学級担任は、ニーズに応じた研修の機会が十分ではないために、特殊教育に対する専門的知識や新しい情報を得にくいことから、児童生徒の実態に応じて指導計画を立案することや学習形態を工夫することが難しいなど、授業を展開するうえで苦慮している現状が見受けられます。

したがって、このような状況を改善していくためには、特殊学級担任が、在籍する児童生徒の理解を深める研修と、指導内容・方法の研修を行い、特殊学級担任としての資質の向上を追求していく必要があります。

そこで、この研究は、小・中学校の特殊学級において、児童生徒の一人一人の「生きる力」をはぐくむための指導内容・方法についての研修試案を作成し、研修試案に基づいた実践をとおして、特殊学級担任の研修の在り方を明らかにし、小・中学校特殊学級担任の指導力の向上に役立てようとするものです。

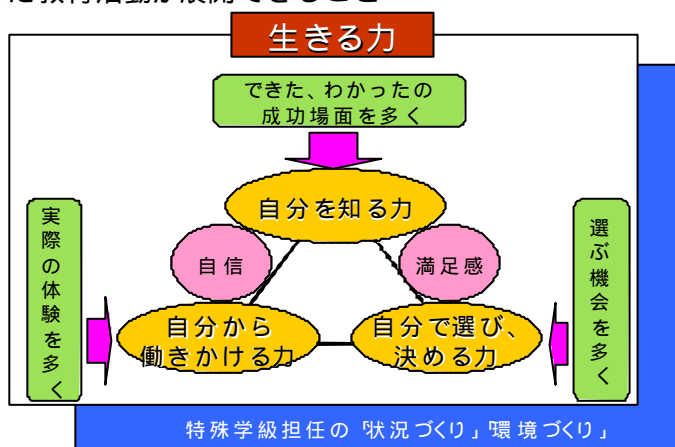
特殊学級担任の研修の進め方についての基本的な考え方

1 特殊学級担任の研修の意義

児童生徒の障害の状態等の多様化、教育内容・方法の改善など今日的な特殊教育を取り巻く現状を踏まえ、特殊学級担任においては、「生きる力」をはぐくむことを重視した教育活動が展開できること、幅広い専門性を身に付けることが必要であると考えました。

(1) 「生きる力」をはぐくむことを重視した教育活動が展開できること

特殊学級において「生きる力」をはぐくむことを重視した教育活動を展開していくことができるために、本研究では「生きる力」を、【図1】に示すとおり、「自分を知る力」「自分から働きかける力」「自分で選び、決める力」の三つの力と考えました。「自分を知る力」とは自分はどんなことができるかわかること、「自分から働きかける力」とは自分から様々な人や物に積極的に働きかけること、



「自分で選び、決める力」とは何をすればよ【図1】特殊学級において目指す「生きる力」
いかに自分で選び、決めることと考えました。これら三つの力の育成のためには「できた」「わかった」等の成功場面をできるだけ多く体験することや、実際の体験、選ぶ機会を多くすることが必要です。そのためには、児童生徒ができる状況、わかる状況をつくっていくことが必要不可欠です。このように、特殊学級担任の「状況づくり」「環境づくり」があってこそ、児童生徒に「生きる力」をはぐくむことができるものと考えました。

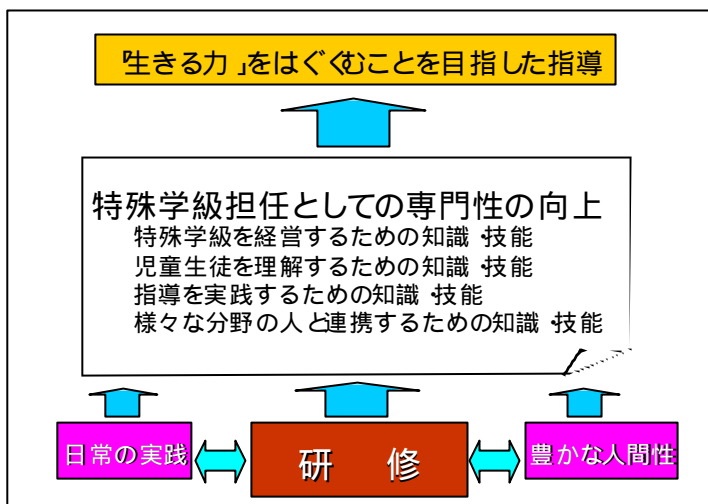
(2) 幅広い専門性を身に付けること

特殊学級担任は日常の教育実践に追われ、特殊教育に対する専門知識や新しい情報を得にくい現状にあります。しかし、今後、校内及び地域から特殊学級担任への特別支援教育に関するニーズは高まると考えられ、特殊学級担任として幅広い専門性を身に付け、高める必要があります。日常の教育実践を積み上げることに加えて、特殊学級担任としての研修を行っていくことは、特殊学級担任の指導力の向上を目指すうえで意義のあることと考えました。

2 研修の在り方についての基本的な考え方

特殊学級担任の研修の在り方についての基本的な考え方は【図2】に示すとおりです。特殊学級担任の研修の目的は、日々の実践力を高め、児童生徒の指導に生かすことにあります。研修と日常の実践をくり返しながら、特殊学級担任としての専門性の向上を図り、「『生きる力』をはぐくむこと」を目指した指導に生かすことができるものと考えます。

児童生徒一人一人の「生きる力」をはぐくむことを目指し、特殊学級担任として幅広い専門性を向上させるためには、特殊学級経営、児童生徒理解、指導の実践、



【図2】特殊学級担任の研修の在り方についての基本的な考え方

様々な分野の人との連携等、それぞれのための知識・技能に関する研修を行っていく必要があると考えました。

特殊学級担任の研修に関する実態調査とその分析・考察

1 調査の概要

特殊学級担任の研修の在り方の資料を得るため、研修の現状について、県内小学校・中学校知的障害、情緒障害特殊学級担任281名に、質問紙により調査を行いました。

調査の内容は【表1】に示すとおりです。

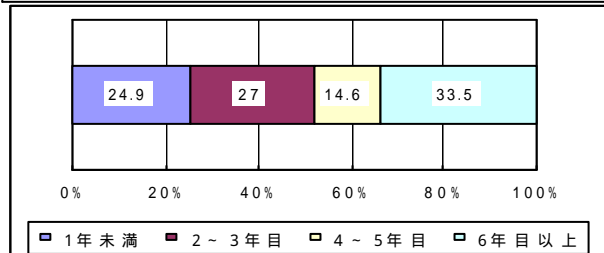
2 調査結果

(1) フェースシートより

フェースシートからは、1学級あたりの児童生徒の人数は、3人以下の学級が全体の75%であることや、特殊学級経験年数については【図3】に示すとおり3年未満の担任が約半分であることなどがわかりました。

【表1】調査の内容

特殊学級担任のこれまでの研修の状況
1 研修の実施状況
2 研修を生かしているか
特殊学級担任の困難さに対する実態
1 授業場面においての困難さ
2 授業以外の場面での困難さ
3 困難さを解決できない理由と研修との関連
特殊学級担任の研修の課題と今後の在り方
1 研修の必要性
2 研修の課題
3 必要とされる研修内容



【図3】特殊学級経験年数

(2) 特殊学級担任のこれまでの研修の状況

研修実施状況については、【図4】に示すとおりです。公的機関での研修についてはほぼ全員が行っていることがわかりました。回数についても年3回以上行っている担任が44.9%でした。しかし、校内での研修は「なし」が32.7%、「1回」の回答を加えても77.3%であり、校内での研修がほとんど行われていませんでした。

自己研修については、各個人により取り組み方にばらつきがあることがわかりました。

(3) 特殊学級担任の困難さに対する実態

ア 授業場面における困難さの実態

授業場面で困難さを感じているかについては、【図5】に示すとおりです。「とても感じる」「どちらかといえば感じる」と約90%の担任が答えしており、ほとんどが困難さを感じていることがわかりました。また、多人数を担当するほど、困難さの度合いが強いこともわかりました。

授業場面で困難さを感じている内容については、【図6】に示すとおりです。特殊学級経験年数別で見た場合、どの経験年数でも多かった項目は「児童生徒の実態に合った教材・教具の選定」でした。授業場面での困難さにおいては、「実際にどうしたらよいか」という面での困難が多く、個別の指導内容・方法を行うことに苦慮していることが考えられます。

イ 授業以外の場面における困難さの実態

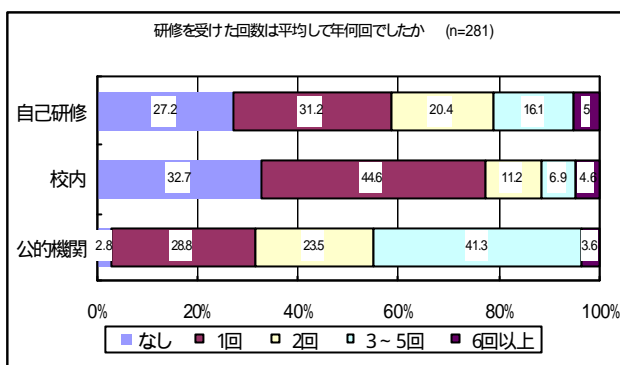
調査から授業以外の場面においても、授業場面と同様ほとんどの担任が困難さを感じていることがわかりました。

授業以外の場面で困難さを感じている内容については、最も多かったのが「通常の学級の児童生徒との関係」でした。しかし、授業場面での困難さでは70%以上の担任があげた項目があり

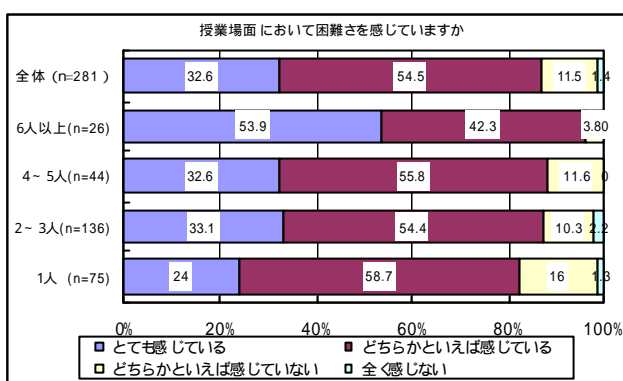
ましたが、授業以外の場面では50%を超える項目はなく、「教育課程や指導計画の作成」「基本的な生活習慣」「校内連携」「保護者との連携」等様々な項目に分散していました。

ウ 困難さを解決できない理由と研修との関連

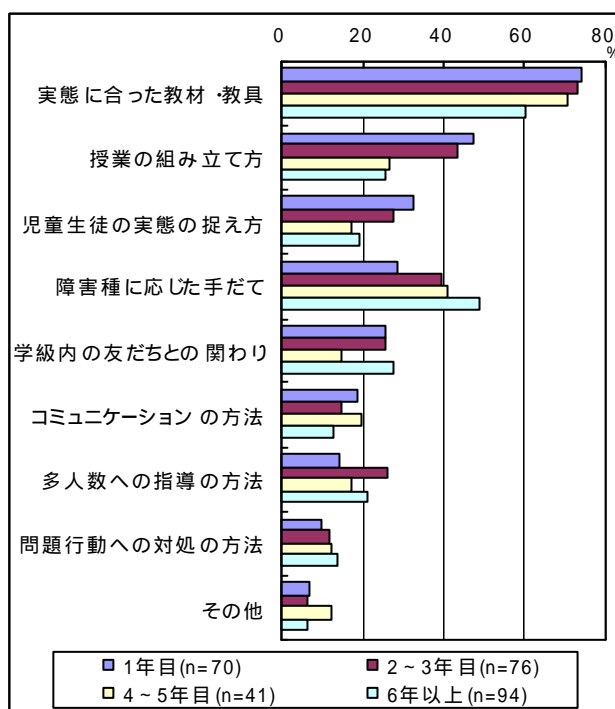
困難さを解決できない理由については、次頁【図7】に示すとおりです。最も多くの担任があげて



【図4】研修実施状況



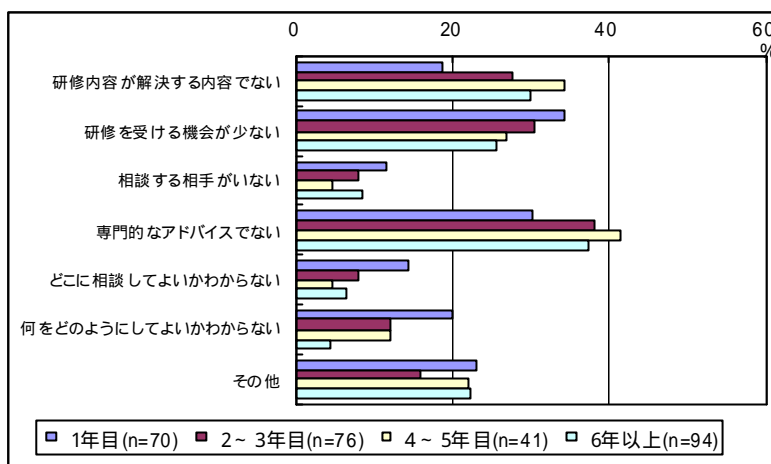
【図5】授業場面での困難さ（学級人数別）



【図6】授業場面での困難さの内容（経験年数別）

いたのは「相談する相手はいるが専門的なアドバイスではない」でした。また、「研修内容が解決する内容でない」「研修を受ける機会が少ない」「研修を受ける機会が少ない」等研修に関する内容も多く、多くの担任があげていました。

また【図7】より、「その他」の項に20%の担任が記述していることから、困難さを解決できない多様な理由があり、研修において解決していくためには、その状況に対応した

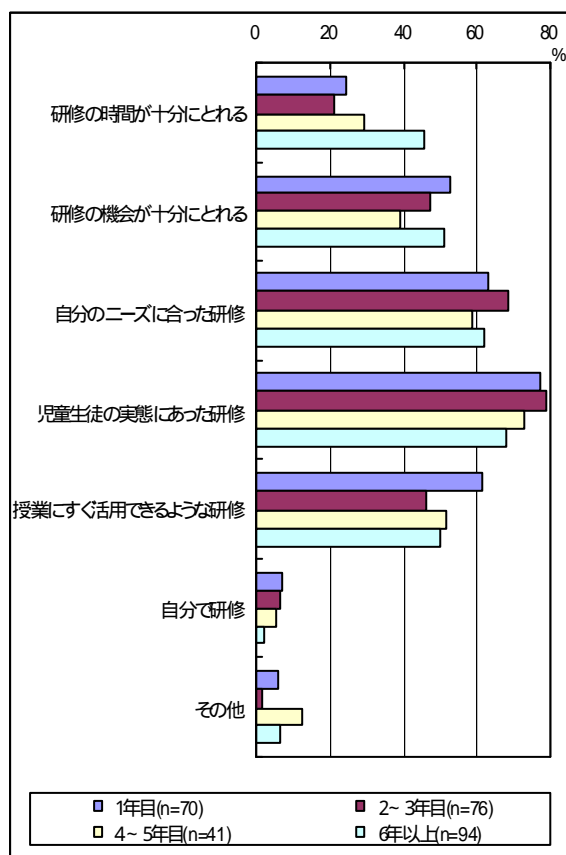


【図7】困難を十分に解決できない理由（経験年数別）研修内容が必要であることがわかりました。

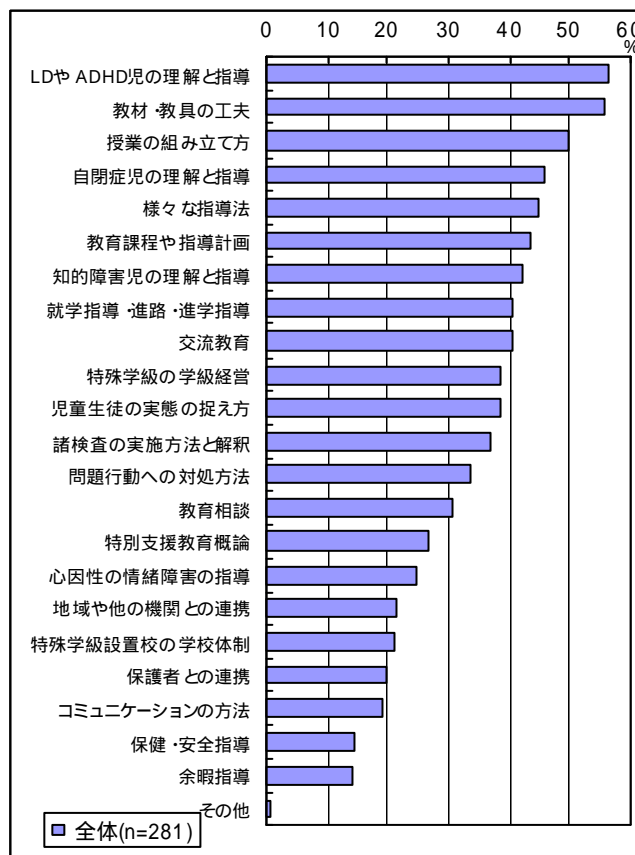
(4) 特殊学級担任の研修の課題と今後の在り方

研修に満足できるようになるにはどのようなことが必要と考えているかについては【図8】に示すとおりです。研修に満足できるためには、研修の内容の改善を図るとともに、研修をどのように行っていくか研修の方法についても検討していくことが課題であることがわかりました。

今後、特殊学級担任として研修したい内容は【図9】に示すとおりです。多い順に5項目あげると、「LD児やADHD児の理解と指導」「教材・教具の工夫」「授業の組み立て方」「自閉症児の理解と指導」「様々な指導法」でした。このうち、「教材・教具の工夫」「授業の組み立て方」は毎日の授業



【図8】研修の課題（経験年数別）



【図9】今後、特殊学級担任として研修したい内容

に関しての内容であり、211頁【図6】授業場面での困難さの回答と一致していました。また「LD児やADHD児の理解と指導」「自閉症児の理解と指導」「様々な指導法」など、幅広い内容の研修を必要としていることがわかりました。

(5) 特殊学級担任として、研修の在り方に関する意見・感想

自由記述による意見・感想を、特殊学級経験年数1～3年目と4年目以上に分け、まとめたものは【表2】のとおりです。

【表2】研修の在り方に関する主な意見・感想

	特殊学級経験1～3年目	特殊学級経験4年目以上
研修内容や時期、機会についての要望・意見	<ul style="list-style-type: none"> ・教材・授業等具体的な研修をしてほしい ・実際の授業にすぐ活用できるような研修をしてほしい ・実践交流できるような場を設けてほしい ・新特担任研を早くしてほしい ・担任側のニーズによって研修内容の選択肢を用意していただく研修を希望 	<ul style="list-style-type: none"> ・養護学校との交流や研修ができる機会を設けてほしい ・長期休業中にやってほしい ・諸検査の実施方法、教育相談の実践的研修を希望する ・障害種に応じた研修があればよい
自分なりの反省や考え	<ul style="list-style-type: none"> ・特学担任に全てが任されることに不安感がある ・状況が許せるなら研修にはできるだけ参加したい ・研修するにも時間的に余裕がない 	<ul style="list-style-type: none"> ・どういことを研修したいかという意識が大切 ・研修は努力して行うべきもの ・自ら努力していかないと研修にならないことがわかった
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・普通学級担任も、一緒に研修を受ける機会がほしい 	<ul style="list-style-type: none"> ・訪問を受けて校内で研修できる体制があれば助かる ・専門的なアドバイザーがいてくれればよい

以上のように、経験年数の少ない担任は、「～のような研修をしてほしい」等研修の内容や機会に対する要望が多い傾向が見られました。一方、経験年数の多い担任にも、要望の記述はありましたが、「研修の意識が大切」「専門的なアドバイザーがいればよい」など、研修の在り方に対する意見が見られました。

このことから、経験年数の少ない担任は多くの研修内容や研修の機会を望んでおり、「研修は自分で進め、行っていくもの」という意識には至っていない傾向があることがわかりました。また、経験年数の多い担任ほど、主体的な意識をもって研修に臨んでいることがわかり、経験年数の多い担任には、研修に対する主体的な意識を生かした研修が必要であると考えました。

3 調査結果のまとめ

(1) 特殊学級担任のこれまでの研修の状況について

研修の機会については、公的機関についてはほぼ全員が行っていましたが、校内での研修はあまり行われていないことが明らかになりました。また、自己研修は、行っていない担任、行っているものの回数が少ない担任、回数が多い担任と一人一人の差が大きいことがわかり、このことは、特殊学級担任の研修に臨む意識の違いが大きく影響しているものと思われます。

また、研修の在り方に関する意見・感想では多くの担任が研修の内容や機会に関する要望等を記述しており、特殊学級担任はこれまで、何を研修していけばよいのかを具体的に示されていないため、公的機関などの研修を頼りにする傾向が強く、研修は自分で進めていくものという意識に至っていないことが原因と考えられます。

以上のことから、研修は自分で行うものという意識のもとに、校内での研修や自己研修を中心に、特殊学級担任が主体的に取り組むことができる研修内容・方法を示していく必要があると考えます。

(2) 特殊学級担任の困難さの実態について

特殊学級担任の多くは困難さを抱えており、その困難さの内容は、学校や学級の状況、特殊学級の児童生徒の人数、特殊学級担当経験年数など一人一人がおかれた環境や児童生徒の発達の状態や特性により、違いがあることが明らかになりました。そして、その困難さは専門的なアドバイスがないことや、研修の内容や機会などの問題点により、十分には解決されていないこともわかりました。

このことから、特殊学級担任が研修により困難さを解決できるようになるには、一人一人のニーズに合った研修内容を示していく必要があると考えます。

(3) 特殊学級担任の研修の課題と今後の在り方について

今回の調査結果から、特殊学級担任として今後研修したい内容は、多様な内容があげられ、多くの研修を必要としていることがわかりました。担任が必要としている内容は、大きく分けて次の二点であることが明らかになりました。

一点目は「教材・教具の工夫」「授業の組み立て方」「教育課程や指導計画」「様々な指導法」等、指導内容・方法にかかわる内容です。「教材・教具の工夫」「授業の組み立て方」「教育課程や指導計画」は、特殊学級担任が困難さを感じる内容の回答とも一致しており、困難さを解決するために必要としている研修内容であることがわかりました。

二点目は、「LD児やADHD児の理解と指導」等、今日的な特別支援教育の課題にかかわる内容の研修です。LD児等を直接的には担当していなくても、校内でのコーディネーターとしての役割を目指し、または、自分自身の知見を広げるために必要としていることがわかりました。

また、特殊教育の動向から「生きる力」をはぐくむことを重視した教育活動を展開していくことを目指していくことが求められており、上記の二点の研修内容を「生きる力」をはぐくむための指導内容・方法と関連させながら研修できるような具体的な研修資料を示していく必要があると考えます。

特殊学級担任の指導力の向上を目指す研修に関する基本構想

1 特殊学級担任の指導力の向上を目指す研修に関する基本構想

実態調査結果と、前述の特殊学級担任の研修の進め方についての基本的な考え方に基づき、本研究の基本構想立案にあたっては、次のような三つの観点からなる研修試案を作成することが必要であると考えました。

校内での研修や自己研修の在り方を示したもの

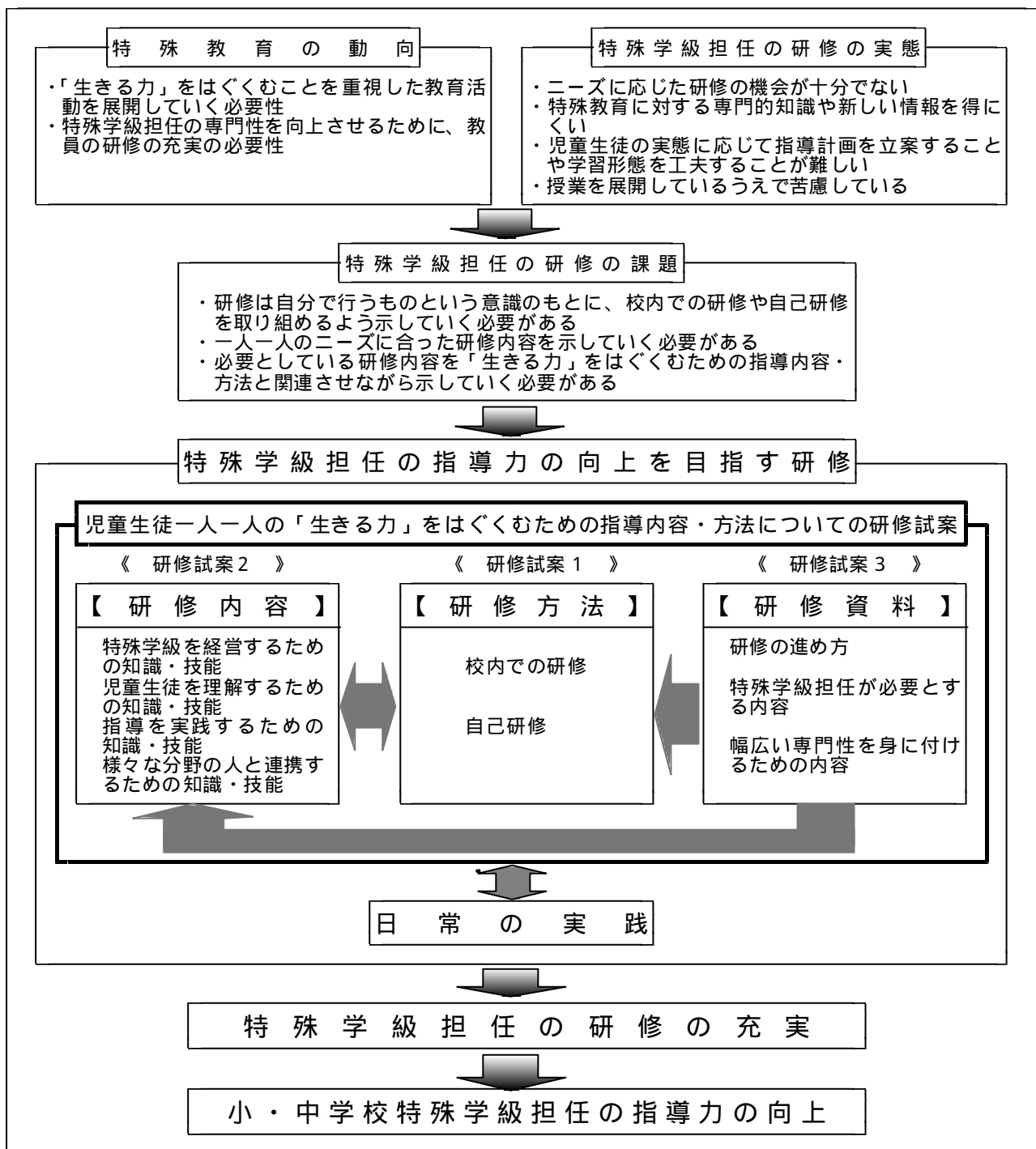
一人一人のニーズに合った研修の内容を選択・決定できるように示したもの

特殊学級担任が「生きる力」をはぐくむための指導内容・方法と関連させながら研修できるような研修資料

この三つの研修試案に基づいた、特殊学級担任の指導実践を行うことにより、特殊学級担任の内容と方法に視点を当てた研修の在り方が明らかになり、特殊学級担任の指導力の向上に役立つのではないかと考えました。

2 特殊学級担任の指導力の向上を目指す研修に関する基本構想図

基本構想をもとに、特殊学級担任の指導力の向上を目指す研修の在り方に関する基本構想図を次頁【図10】のように作成しました。



【図10】特殊学級担任の指導力の向上を目指す研修に関する基本構想図

児童生徒一人一人の「生きる力」をはぐくむための指導内容・方法についての研修試案

1 児童生徒一人一人の「生きる力」をはぐくむための指導内容・方法についての研修試案作成の基本的な考え方

研修試案の作成にあたり、基本的な考え方は、次のようにおさえました。

調査結果から、特殊学級担任は「研修は校外で行う」という意識が強い状況を踏まえ、校内や自分でやっていくものであるということを、具体的に、どのような時に、どのような方法で行っ

ていけばよいか を示した研修試案を作成する必要があること

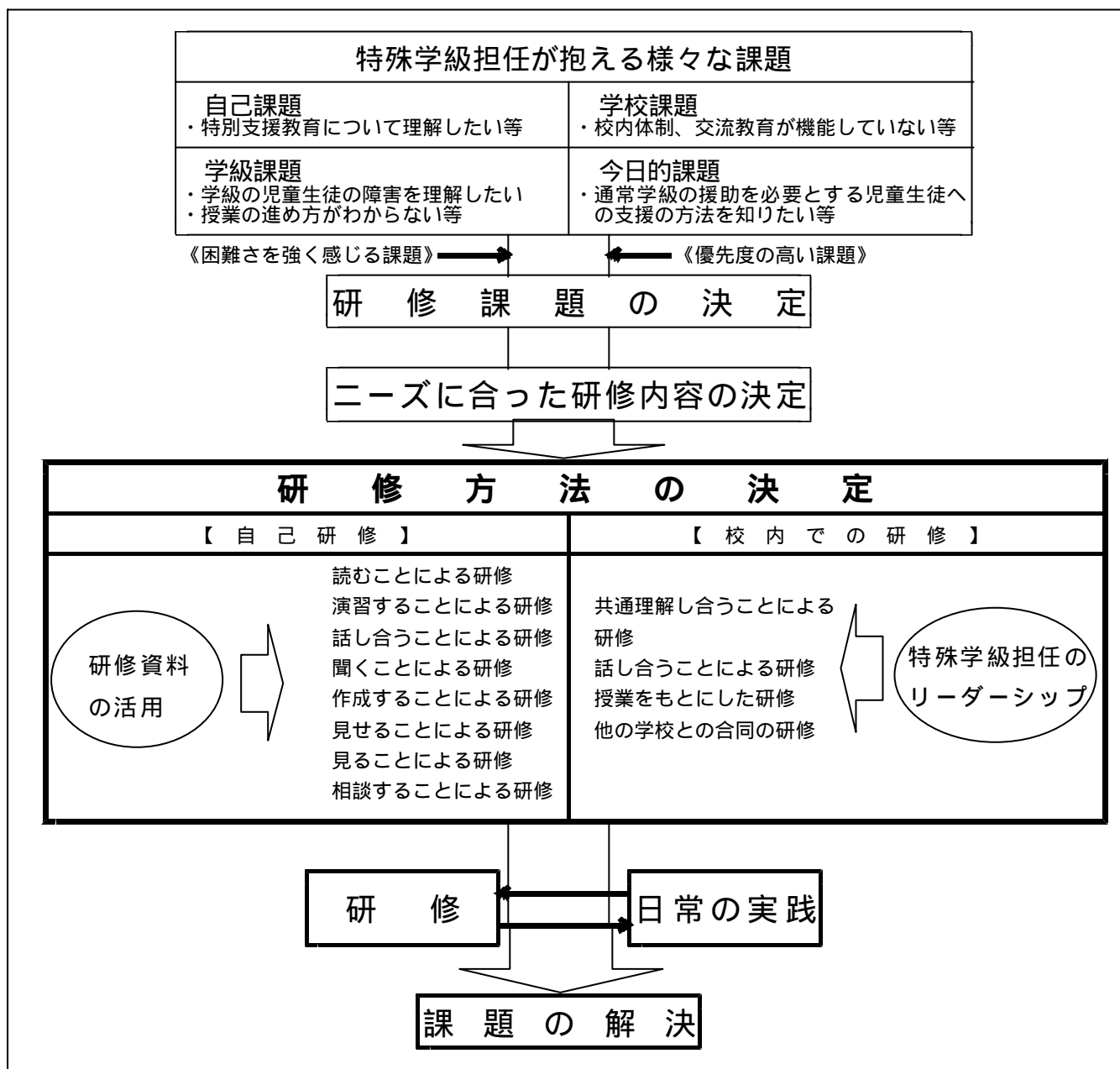
研修の内容については、学校の種別、学級の種別、経験年数別、担当する児童生徒の人数別、児童生徒の障害や発達の状態、特殊学級担任をとりまく状況などにより、一人一人のニーズが異なっているという現状を踏まえ、特殊学級担任が自ら研修の内容を選ぶことができるように具体的に示した研修試案を作成する必要があること

研修資料は、担任の必要とする内容を「生きる力」をはぐくむための指導内容・方法と関連づけ、特殊学級担任が日常的に参考にできるように、具体的な例を示しながら作成する必要があること

以上の基本的な考え方をもとに、三つの研修試案を作成しました。

2 研修試案 1 「校内での研修、自己研修を中心にした研修の方法」

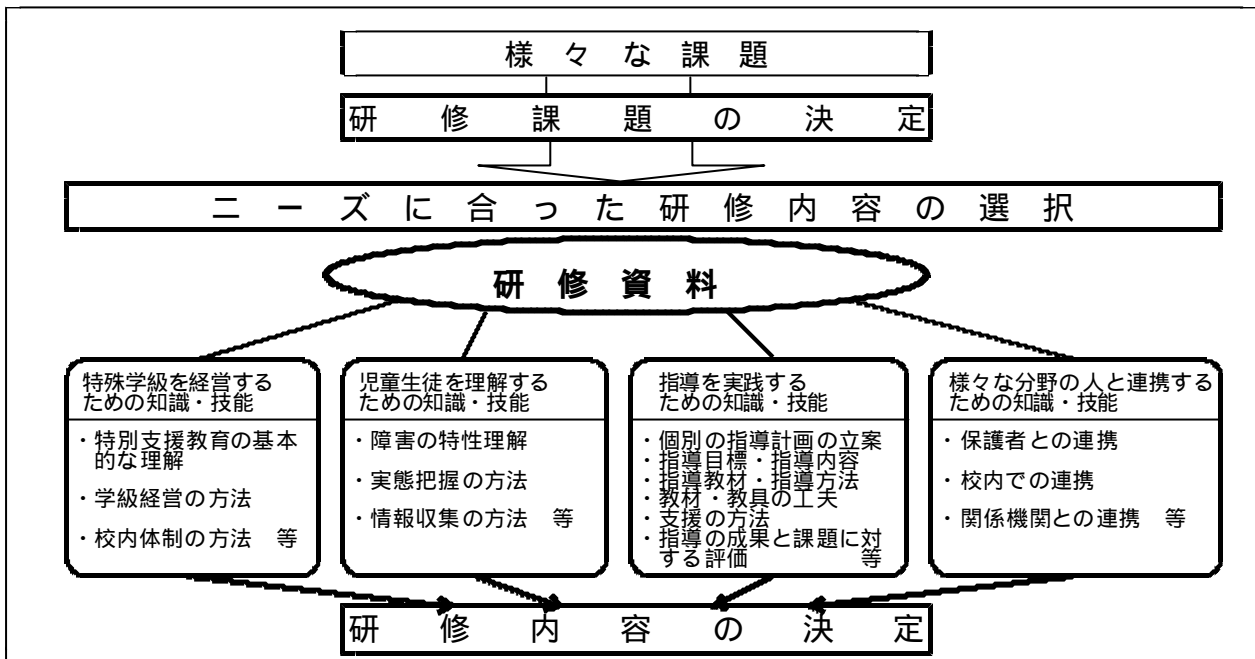
研修試案 1 「校内での研修、自己研修を中心にした研修の方法」を【図11】のように考えました。



【図11】 研修試案 1 「校内での研修、自己研修を中心にした研修の方法」

3 研修試案2「ニーズに合った研修内容」

研修試案2「ニーズに合った研修内容」を、【図12】のように考えました。

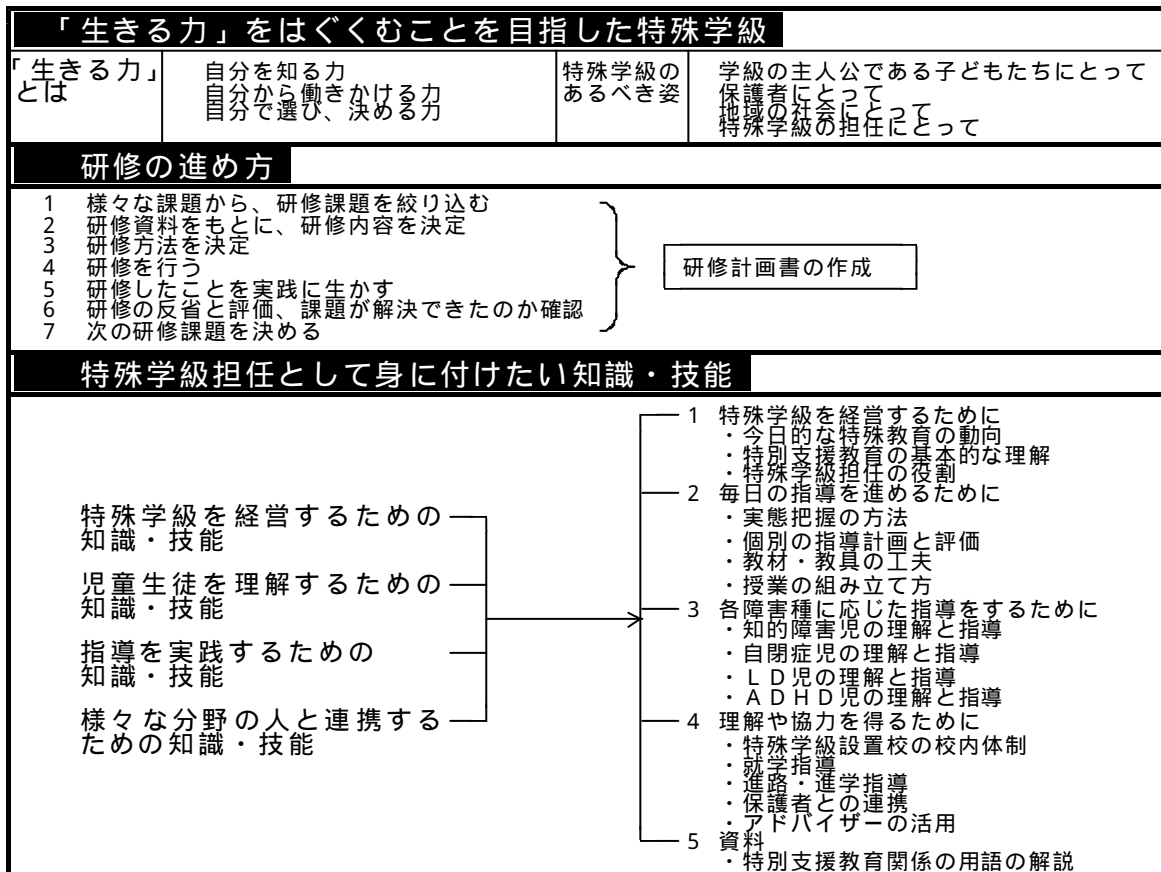


【図12】研修試案2「ニーズに合った研修内容」

4 研修試案3「『生きる力』をはぐくむための指導内容・方法についての研修資料」

研修試案3「『生きる力』をはぐくむための指導内容・方法についての研修資料」の方向性を、

【図13】のように考えました。



【図13】研修試案3「『生きる力』をはぐくむための指導内容・方法についての研修資料」

研究のまとめと今後の課題

1 今年度研究の成果

(1) 特殊学級担任の研修の進め方についての基本的な考え方について

特殊教育の動向から、特殊学級担任が「生きる力」をはぐくむことを重視した教育活動の展開や、幅広い専門性の向上を目指し研修することは、意義のあることが明らかになりました。したがって、児童生徒一人一人の「生きる力」をはぐくむことを目指し、次の四点についての研修を行っていく必要があると考えました。

特殊学級を経営するための知識・技能

児童生徒を理解するための知識・技能

指導を実践するための知識・技能

様々な分野の人と連携するための知識・技能

(2) 特殊学級担任の研修に関する実態調査とその分析・考察について

特殊学級担任の研修の現状について実態調査を行い、その結果、次の三点について、課題が明らかになりました。

公的機関の研修は行っているが校内での研修や自己研修の機会が少ないこと

特殊学級担任は困難さを感じているものの、研修の内容がニーズに合っていないため、実践において苦慮していること

特殊学級担任は、児童生徒の指導内容・方法にかかわる研修や今日的な課題の研修を必要としていること

(3) 特殊学級担任の指導力の向上を目指す研修に関する基本構想の立案と、それに基づく研修試案の作成について

実態調査で明らかになった課題を解決するため、特殊学級担任の指導力の向上を目指す研修の在り方について検討し、基本構想を立案しました。そして、次の三つの研修試案を作成しました。

研修試案 1 「校内での研修、自己研修を中心にした研修の方法」

研修試案 2 「ニーズに合った研修内容」

研修試案 3 「『生きる力』をはぐくむための指導内容・方法についての研修資料」

2 今後の課題

次年度は、今年度作成した研修試案をもとにして実践を行い、具体的に、特殊学級の研修の在り方について明らかにしていきたいと考えています。

【参考文献】

- | | |
|-------------------------------------|---------------------|
| 国立特殊教育総合研究所「教員の資質の向上と教員システムに関する研究」 | 1999年 |
| 大南英明著 「知的障害教育のむかし今これから」 | ジアース教育新社 1999年 |
| 細村迪夫著 「障害児教育の教育課程 - その進展と創造に向けて - 」 | コレール社 2000年 |
| 北海道立特殊教育センター「特殊学級担任のためのハンドブック」 | 2001年 |
| 文部科学省初等科中等教育局特別支援教育課編集 | |
| 「特別支援教育 特集『専門性の向上』」 | 2001 3 東洋館出版社 2001年 |